

いま「ポスト資本主義」をどう論ずるか



石川 康宏

いしかわ・やすひろ 1957年まれ。経済理論・経済政策論。著書に『「おこぼれ経済」という神話』（新日本出版社）、『古典教室』全3巻を語る（共、同）、『マルクスのかじり方』（同）、『若者よマルクスを讀もう』（共、I・II、かもがわ出版）、『人間の復興か、資本の論理か3・11後の日本』（自治体研究社）など。

「資本主義の発展段階」を論じた先日の原稿（『経済1月号』）を、私は次のように締めくくっておきました。

「社会の改革に向けた労働者の闘いという時、その内容や力強さは、資本主義の枠内での改良を直接の課題とする場合にも、未来社会への転換を含む、より長期の展望がどれほど豊かであるかによっても左右されます。目の前の課題を乗り越えるための改良の政策とともに、そのような課題を生み出さずにおれない資本主義の歴史的制約に対する告発と、それを乗り越える社会の可能性を提起することは、いつでも理論活動の重要な仕事となりま

す。資本主義の『終焉』や行き詰まりが様々に指摘される現段階にあつて、その必要性はますます高くなつていくといつてよいでしょう」。

小論執筆にあつたの編集者からの求めは、『ポスト資本主義を構想する』（本の泉社、2014年）についての感想・意見を述べ、さらにこの問題にまつわる自説を述べよというものでした。私には明らかに荷が勝ちすぎる仕事ではありますが、右のように書いた手前、各論文の内容を紹介するところから、ともかく議論を始めてみたいと思えます。

1、軸足を20世紀「社会主義」論に置いて

『ポスト資本主義を構想する』は、『季論21』第25号掲載の諸論考（特集「ポスト資本主義へのアプローチ」）を中心に編まれた著作です。

「編集人」による「はじめに」は、現在の日本の政治・経済状況を簡潔に紹介した上で、「それらは、日本資本主義に個別のものとして現れているのではなく、世界資本主義に濃淡はあれ共通する様相でもある」。「もはや、このような資本主義は終わらせなくてはいけない。私たちは、この資本主義の延長や改良においてではなく、違った未来の違った社会と、そこでの人々の暮らし、人格、自由、民主主義、平等、平和……などを語らなくてはいけないのではないだろうか」「真摯な議論を願っている」と、出版の目的を語っています。

「改良においてではなく」なのか「改良とともに」なのかは、それ自体が大きな論点ですが、それはここでは先に送っておくことにします。

最初は、長砂實「『新しい社会主義』を模索する」です。長砂論文は、日本社会の現状を「客観的には」「『左

翼』の定番」の時だとし、「この時代的要請に応えるには……『新しい社会主義』を構想することが必要不可欠」である。それには、①マルクス主義の古典的諸命題の確認と発展、②「20世紀社会主義」のトータルな総括、③グローバル資本主義を乗り越える社会主義像の積極的な提示が必要だとします。

古典の検討では、近年の「(マルクス) 未来社会論」は、共産主義の第一段階と「より高度な段階」の区別の側面を軽視し、第一段階と過渡期を混同する点で「未完」の議論であるとして、また共産主義を商品経済と相いれないものと理解した点を、マルクスの最大の「躓きの石」のひとつとします。

他方「20世紀社会主義」については、崩壊した「ソ連社会主義」、ハンガリー型「市場社会主義」、ユーゴスラビア型「自主管理社会主義」、今も生き延びている「中国的特色をもった社会主義」などの全体を国際的な「規模」で、国内外の事情、客観的・主体的条件、肯定的・否定的側面に目を配り「総合的に総括する」ことの必要を指摘した上で、かつてのソ連・東欧諸国を「失敗した『資本主義から社会主義への過渡期』社会」ととらえます。社会主義をめざす過渡期にはあったが、過渡を進みきることは失敗したという評価でしょう。

いま「ポスト資本主義」をどう論ずるか

最後に未来へ向けた「新しい社会主義」の特徴として8点をあげ、資本主義の改革と社会主義革命の関連の解明をふくむ、開かれた討論の必要を訴えています。

荒木武司「『実現可能な社会主義』について考える」は、現代社会を覆う「閉塞感」の「最重要の要因の一つ」に「ポスト資本主義」を見出すことのできない現実の問題があるとして、これを提示することの必要を強調します。

その上で、マルクスが掲げた「終極目標」は実現可能とは思われず、加えてソ連社会もマルクスからの「派生」であることを考慮すれば、その失敗はマルクス自身の失敗でもある。そこで「実現可能な社会主義」は、マルクス社会主義論の「相対化から再出発しなければ」ならない。その一つの柱は、資本主義の改良主義的戦略にもとづく「多元的民主主義の原理に立脚した『民主主義的社会主義』のシステム」であり、もう一つの柱は「互恵的」市場の積極的な評価にもとづく「市場社会主義」である」と指摘します。

聴濤弘「『ソ連』とは何だったのか」は、ソ連崩壊をきっかけに現実の「政治生活」で、マルクス主義者が「社会

主義」を語らなくなるという「混迷」が生まれているとして、①国家資本主義論、②国家社会主義論、③非資本主義論、④「囚人労働」の強調にもとづく社会主義でも過渡期でもなかった論の4つのソ連社会論を紹介し、その上でソ連史全体の「鳥瞰」が必要だとして、そこに含まれるべき諸要素を次のように列挙します。

①経済や文化の遅れた段階からの出発、②労働者集団を党が代行し、党をスターリンが変質させた歴史、③「めしの食える国」の一方に生まれた社会の停滞を打破しようとしたゴルバチョフ、④「社会主義的生産関係の一定の形成が目指された結果」としての労働者からのノメンクラトゥラの独立性、⑤大テロルは囚人労働の獲得を目的としておらず、国民総動員の「熱狂」によって担われた工業化、⑥国家的所有の実態の曖昧さによる指導部の無責任主義、⑦社会主義的計画経済への実験的な苦闘としての指令的「国家統制経済」、⑧党の変質の第一点としての異論の排除、⑨第二点としてのノメンクラトゥラによる位階制社会の形成、そして最後に、⑩結論——社会主義的生産関係の形成をめざした「過渡期」社会としてのソ連、が指摘されています。

岩田昌征「自主管理社会主義（ユーゴスラビア）の歴

史的意義を再考するために」は、半世紀に及ぶ著者の研究史に即して、ユーゴ社会主義論を「反省的に回想」したものです。

取り上げられるのは、

①新しい生産関係、新しい「生産の組織形態」が創造されなければ、革命後の社会も旧社会に回帰する可能性がある（1971年著）。②ソ連は国権主義的社会主義、ユーゴは民権主義的社会主義、ユーゴは商品生産を廃止しない社会主義だった（1974年著）。③長期に渡る「社会有」(国有でなく)を可能にしたものは労働者評議会による自主管理制度だった（1974年著）。④市場社会主義は経済の発展をもたらす一方で、格差の拡大や党の威信低下を招き、ここに誤った「ユートピア的自主管理連合労働体制」が強行される（1975年・83年著）。⑤この労働体制は機能せず、社会に不和・不信や病的なナショナリズムが生み出されていった（1983年著）、などの諸点です。

最後に、崩壊後の社会における自主管理への「郷愁」の事例が紹介され、またユーゴとソ連・東欧に共通した「党社会主義」という性格が、崩壊後の社会への人民の適応の困難を生み出していることも指摘されています。

大西広「中国……社会主義をめざす資本主義」は、親中から反中への日本の国民感情の歴史的な逆転とその世界的な特異性の指摘に始まり、つづいて資本主義を「産業革命後の資本蓄積が第一義的課題となった社会／システム」、社会主義を「知識革命後の知識や創造性といった人間的要素の発達が第一義的課題となった社会／システム」と定義して、現代の中国を「私的資本主義」ないし「市場資本主義」と捉えます。

社会主義を「めざす」とすることの根拠としては、貧困家庭への大学進学保障の拡大、農民税の廃止、社会保障制度の一定の整備、賃金と労働分配率の上昇などがあげられ、政治的民主主義についても、西側と異なる形態での独特の「実験」が指摘され、加えて社会主義に相応しい人格を形成する努力が、二十数年後の中国のゼロ成長（それは資本主義の限界を示す）までに急がなければならないと主張します。

北見秀司「アタック・フランスとフランス緑の党の政策提案」は、様々な形での「非資本主義的民主主義」の構想と部分的な実践が、世界各地にすでにあるとして、その中からアタック・フランス（金融取引税と市民活動のための団体）とフランス緑の党（ヨーロッパエコロジー・緑

いま「ポスト資本主義」をどう論ずるか

の諸政策を紹介します。その基調は、新自由主義にもとづく規制緩和と投機の自由化に対し、参加民主主義の政治によって経済コントロールの内容を転換し、万人の生命と自由の維持および自然環境の維持を最優先する社会づくりを目指すというものです。

具体的な政策としては、

①コミュニティにもとづく民主主義（企業の民主化、最低・最高賃金制度、ワーク・シェアリング、参加民主主義の拡張）、②国の政策（解雇や海外移転についての企業規制、公共サービスの民営化禁止、公的住宅サービスの充実、大企業の法人税増税、各種の環境保護、有機農業の育成、車社会からの脱却、縦割り行政の見直し、健康や自然を守る上での「予防原則」の実施）、③命・自由・自然を守る「もうひとつのグローバルイゼーション」（タックスヘイブンやヘッジファンドの禁止、一次産品先物市場の廃止、法人税の国家間調整、資本移動の制限、グローバルな税の創設（国際的な金融・株取引への課税、多国籍企業の利益への同率課税、富裕税）、EUに公共金融センターを、IMF・世銀を国連総会でコントロールする、パートナーシップにもとづく国際秩序）、などがあげられます。最後に、より実質的な民主主義を求めている政治への介入の必要を強調しています。

2、どこを出発点とした「ポスト資本主義」か

見られるように展開される論点は実に様々ですが、ここでは次のように整理してみます。

20世紀の「社会主義」と21世紀の「ポスト資本主義」

第一に「ポスト資本主義」を論ずる基本的な方法の問題についてです。ここでは全6編のうち5編までが、ソ連・東欧（長砂論文、ソ連（荒木論文、聴濤論文）、ユーゴ（岩田論文）、中国（大西論文）と対象国はそれぞれですが、20世紀以後の「社会主義」（それが果たして社会主義であった（ある）のか、あるいはそれをめざす過渡期の社会であった（ある）のかということ自体が大きな論点です）、ここでは社会主義にカギカッコをつけておくことにします）を論じながら、大きくは「ポスト資本主義」（社会主義の未来を構想するというものになっていません）。

荒木論文は、比較的、「社会主義」に関する記述が少なくなっていますが、それでも「歴史的現実態としてのソ連社会主義」への評価を基準に、それが「基本的に『マルクス社会主義』から派生した」ものであること、ある

いは「本源的には『マルクス社会主義』論が看過していた問題」をはらんだ社会だということ論じるものになっ

ています。これに対して、現在の資本主義から「ポスト資本主義」への進展という論を立てる唯一のものが、北見論文です。すでに紹介したように「非資本主義的民主主義の代替案」の具体例が紹介されます。ただし、それが「脱資本主義」や「資本主義に代わる社会」にどう結びついていくのか、そこに展望される新しい社会はどのような姿をもつかについては、具体的な論及はありません。

このように整理してみると、「編集人」が「はじめに」で設定した問題と、諸論文の回答との間には、ある種のずれが指摘できるかも知れません。設定された問題は、21世紀の日本と世界における「ポスト資本主義」への試みですが、それが胎内にどのような新しい社会を育てており、また新しい社会への変化の衝動をはらんでいるのか、全体としては、その点の究明が中心に座った論集にはなっていないように思えるのです。

もちろん現代社会の変革を展望すれば、「ソ連・東欧・中国のようになりたいのか？」という批判が、いまの日本にも根強くありますから、そこを科学的に分析し抜く作業は不可欠です。しかし、21世紀における「ポスト資本

主義」を論ずるのであれば、その究明の本筋は、やはり日本や世界がどのように「ポスト資本主義」を内包し、成熟させ、その誕生への準備を深めているかの分析でなければならぬように思うのですがいかがでしょうか。

字数の限られた個々の論文に、いつでも究明の全体を求めることはできませんし、また「はじめに」が、おそらく諸論考の執筆後に書かれたという事情を考慮する必要もあるかも知れません。とはいえ、率直な読後感の第一として、この点を指摘しないわけにはいきません。

マルクスの議論の評価をめぐる

第二に、本書におけるマルクスへの評価の問題についてです。

この点で、もつとも積極的に論を展開しているのは長砂論文です。長砂氏は、①まず『経済学批判』序言での史的唯物論の「定式」に、「旧来の社会主義」の総括とこれからの「新しい社会主義」の模索の「導き」を見出すべきだとしています。②つづいて、資本主義が成立していく期間に対し、死滅の期間（それが社会主義にいたる期間）は、「比べものにならないほど短い」（『資本論』）のが、この点でのマルクスの「結論」だとします。③その上で「資本主義社会と共産主義社会とのあいだ……の過渡期」

いま「ポスト資本主義」をどう論ずるか

（「ゴータ綱領批判」）は、資本主義の諸要素が消滅し、共産主義の諸要素が勝利していく時期だとされ、④さらに、過渡期をへて実現される共産主義を、マルクスは資本主義の「母斑」の存続か消滅かを大きな基準に二段階に分けたとします（「ゴータ綱領批判」）。⑤最後にマルクスもエンゲルスも広義の共産主義における商品生産の消滅を展望したが、これは最大の「躓きの石」の一つとなったと指摘しています。

大きく立場を違えるのは荒木論文で、荒木氏はマルクスの社会主義論も、それに先行した議論と同じく「ユーロピア的代替案」にすぎなかったとし、これとは異なる社会主義の構想が必要になっていることを強調します。分業の消滅、生命的欲求としての労働、個人の全面発達、協同的富の汪溢、必要に応じた分配などのマルクスの社会主義論は、「千年王国」的な「実現不可能」なものであり、他方でソ連社会に現れた私的所有の廃棄と計画経済制度、プロレタリアの独裁論、コンミュニオン型国家論（権力の集中統合）は、マルクスから派生したものである。したがって、今後の説得力ある社会主義論は、マルクスの議論とは次元の異なるものでなければならぬとされています。

他には、聴濤論文が、ソ連社会の評価にかかわる限り

で、マルクスが市場経済に計画経済を「対置」していたことを指摘し、岩田論文がユーゴ社会の評価にかかわって、同じことを示すにとどまっています。

これら4つの論文は、マルクスによる市場なき社会主義の展望が、大きな誤りがあったとの評価では一致しています。しかし、見られるようにマルクスへの正確な理解が「ポスト資本主義」への重要な指針のひとつになるとする長砂論文と、マルクスとは次元の異なる探求が必要とする荒木論文の評価は対照的です。これは両者のソ連・東欧社会への理解とも深く絡み合う問題でしょうが、とりあえずここでは、マルクスの現代的有効性の評価以前に、マルクスその人が展開した議論を正確にとらえるという作業が、依然として重要な課題として残されているということを確認しておきたいと思えます。それは、長砂論文があえて「（マルクス）未来社会論はなお未完」としている諸点もふくめて、学問的誠実さをもって大いに論じ、深められるべき事柄だと考えます。

なお、現代世界がどのように「ポスト資本主義」を内包しているかという視角の希薄さにかかわってのことでしようが、本書にはマルクスによる「ポスト資本主義」探求の核心となる資本主義分析の当否あるいは過不足を論ずる部分がありません。この点は、本書執筆者に限ら

ず、現代資本主義の究明を主な課題とする研究者たちが、私も含めて広く共有すべき問題といえるのでしよう。

20世紀「社会主義」をどう見るか

第三に、20世紀以後の「社会主義」への評価についてです。これについては、第1節で少し詳しくまとめおきました。

できるだけ重複を避けて述べるなら、長砂論文は、ソ連の他に、ハンガリー型、ユーゴスラビア型、中国型などの「20世紀社会主義」の全体を総合的にとらえることの必要を述べ、その上で、ソ連・東欧諸国を「失敗した」資本主義から社会主義への過渡期「社会」と位置づけます。荒木論文は、ソ連では、プロレタリアートの独裁と生産手段の社会化がまがりなりにも実現したが、計画経済は機能せず（商品・貨幣関係は消滅せず）、死滅に向かうはずの国家は逆に強権国家として肥大化した。それがソ連社会の歴史的现实だったとしています。

聽濤論文はソ連史を、①レーニンのリアリズムと知性の時代、②スターリンによる抑圧社会の形成、③フルシチョフによる修正の試み、④ブレジネフによる揺り戻し（ただし国民の生活水準はこの時期が最高で、「冷戦」と戦争による軍拡がなければ経済構造の奇形化は多くの点で避けられ

た、⑤「人間疎外の克服」を目的にかかげたゴルバチョフによるペレストロイカの時代とまとめ、こうした歴史の全過程を視野に入れたソ連の規定が必要で、これを「スターリンの犯罪」一色に塗りつぶすことはできないとしています。そうして、第1節にまとめたソ連社会論の諸要素をあげ、結論としてソ連を、多くの誤りや試行錯誤、未熟さはあっても「社会主義的生産関係の形成を指摘していた『過渡期』にある社会」だったと総括します。

岩田論文は、対象をユーゴスラビアの労働者自主管理社会主義に限定した上で、戦後初期の国有・国营と計画経済から、労働者自主管理企業と市場メカニズムの活用、国家による経済の規制へと社会システムの移行が進み、1950年代後半から60年代は「市場社会主義の時代」となった。しかし、市場は経済に活力をもたらさず一方、格差やテクノクラートの政治的発言力を拡大させ、70年代には、これらの問題を一挙に解決するとされた自主管理連合労働体制が導入される。これはまったく機能しないユートピアで、80年代には社会の不和と分裂が進行した。そして社会主義の崩壊は、同時に民族間の戦争による国家の分裂をもたらした、とまとめます。

岩田氏は、ソ連は国権主義的社会主義、ユーゴは民権主義的社会主義と両者を区別しながら、同時に、実社会

いま「ポスト資本主義」をどう論ずるか

の外から党が「良きシステム」を与える党社会主義としての共通の限界性を指摘しています。

大西論文は、現代中国を「私的」あるいは「市場」資本主義ととらえています。同時に、旧ソ連、東欧、毛沢東時代の中国を国家資本主義とする見解も示しています。

このように、20世紀以後の「社会主義」に対する各論文の評価も多様です。ソ連・東欧を社会主義への「過渡期」にあつたとする長砂論文、同じくソ連を「過渡期」にあつたとする聴濤論文の他、必ずしも明示的ではありませんが、革命後の社会が資本主義に回帰する可能性を論じていたとする岩田論文も、ユーゴ社会主義を一度は足を踏み入れた「過渡期」を成功裡に歩むことができなかつた歴史ととらえていると見てよいでしょう。

他方で大西論文は、それらを「過渡期」以前の「国家資本主義」だとしており、「マルクス社会主義」をユートピアだとする荒木論文は、マルクスの理論を根拠に「過渡期」や社会主義の段階を論ずるといった議論そのものを行っていません。

内的発展の論理、覇権主義

私には、実在した（する）これら社会について、突っ

込んだ評価をする力はありません。それぞれの社会と歴史についての具体的な知識があまりに不足しているからです。社会主義を論ずるのは荷が勝ちすぎると冒頭に述べた、最大の理由はここにありました。ここでは、それらに通じたみなさんの研究に対する期待を込めて、二つの問題提起をすゝめさせていただきます。

第1は、マルクスが展望した「過渡期」論や社会主義の発展段階論は、20世紀以後の「社会主義」を評価する基準としてどの程度の有効性をもつと考えるかについてです。

有効性がまつたくないと言いたいものではありません。しかし、マルクスは社会主義をめざす革命政権の樹立やその下での社会の動きを直接分析して、「過渡期」や社会主義の発展を論じたわけではありません。加えて、マルクスは資本主義として十分な成熟を遂げた社会からの革命を展望していました。

そうであれば、20世紀以後の「社会主義」を論ずる時に、まず行われるべきは、それら社会の発展をそれぞれがもつ内的な論理（その上でもちろん国際関係の影響も）に即してとらえることではないかと思うのです。たとえば革命前の社会から、どのような論理の下にどのような革命がもたらされ、その政権の下で社会はどのように改革

され、あるいは発展し、また、どのような論理にもとづいて崩壊への道をたどらずにおられなかったのか。あるいは崩壊せずに今の社会状況を迎えているのか。その一連の発展（崩壊もふくめて）の論理をつかみだすことが、優先されねばならないのではないか。「過渡期」などにかなするマルクスの展望が、そこでどのような有効性をもつかの判断は、あくまでそうした具体的な研究を基準に行われるべきではないかと思うのです。

もちろん休むことなく激しい闘争が行われる現実政治の世界には、そうした研究の成就をゆっくり待つゆとりはなく、時々の政治・言論状況に応じて、その時々語りうる「結論」を主張せねばならない事情はあります。そしてマルクス主義の立場に立った研究者には、そうした政治の生々しい要請に、機敏に 대응することも要請されます。しかし、同時に、それを越えて、より視野の広い研究の進展をはかることが、「ポスト資本主義」をふくめ、よりよい社会の実現に努力する研究者の主要な課題ではないかと思うのです。

聽濤論文はソ連史を「鳥瞰」することの必要を語っていますし、岩田論文もユーゴの革命直後から今日までの社会変化を、大きな視野でとらえています。他の執筆者にも、この点については、すでに十分な究明の蓄積があ

るのかも知れません。その場合には、ご容赦ください。

第2は、覇権主義の問題についてです。対外的に民主主義のルールを守ることのできない権力が、その内部に民主的な社会を形成するなどということがありうるのかという問題です。スターリン時代以降のソ連政府は、二枚舌、三枚舌を駆使しての陰謀や、他党幹部へのテロも辞さずに、あからさまな対外侵略、内政干渉、外国党への介入などを繰り返しました。その点については、ゴルバチョフ政権を含む歴史の最後の瞬間まで、ソ連政府に本質的な反省が生まれることはなかったものと思います。

同様の覇権主義は、一時期の中国にも強く現れた現象です。

これは、それらの社会の評価にとって、決して外的・副次的な問題ではなく、内的本質そのものを現わす問題だったのではないのでしょうか。それはソ連からの軍事・政治介入を受けて「ソ連型」と呼ばずにおれない社会をつくったとされる東欧諸国や、あるいはそれに一定の抵抗を示した社会（ユーゴも含めて）の評価にも、深く関わることにように思います。

本書には、各国の覇権主義に対する検討がどこにも登場しませんので、一言ふれておきたいと思います。

いま「ポスト資本主義」をどう論ずるか

新しい「ポスト資本主義」について

「ポスト資本主義」の構想については、そう多くが語られているわけではありません。

長砂論文は「旧来の社会主義」と異なる「新しい社会主義」の特徴を8つの角度からまとめています。荒木論文は、「マルクス社会主義」に代わる「実現可能な社会主義」の問題を、古いプロレタリア独裁に対する民主主義の実現と、古い計画経済体制に対する市場経済システムの実現に要約します。

聴濤論文は、新しい社会主義をつくる条件として、マルクスやソ連の時代と異なる生産力の発展と、労働者の中に「市民性」を育むにいたった文明の発展をあげています。岩田論文は、ここには書いていませんが、文中に参照を求めた著書『ユーゴスラビア』で、党社会主義の時代は終焉しても、本来の自生的自主管理連合労働は、人間化ファクターとして生き続けると指摘しています。

大西論文にも、特別の構想の提示はありません。ただし「知識革命後の知識や創造性といった人間的要素の発達が第一義的課題となった社会／システム」という社会主義についての定義そのものが、それに代わるものと言えるのかも知れません。

北見論文にも、具体的な社会構想は示されません。ただし、そこにいたる改革の推進力として「万人の命と自由の保障を究極の目的とする民主主義」の追求が指摘されています。

ここで考えさせられたことの中心は、新しい「ポスト資本主義」を構想する時に、その力点を、現代の世界と日本を出発点とする「ポスト資本主義」に置くのか、それとも現存した（する）「社会主義」の失敗や苦闘の経験から導かれた新しい社会主義に置くのか、この点をはっきりさせる必要があるのではないかとことです。長砂論文と聴濤論文は、すでに両方の要素が必要だとの立場を示しており、私も一般的には、これに同意するものですが、その上で、21世紀の現代における「ポスト資本主義」は、なにより現代資本主義の内部に見出されるべきものであり、旧来の「社会主義」の経験から、何をどのような教訓として見出しうるかという基準もまた、21世紀の資本主義が今後もさらに展開するだろう具体的な姿に応じて設定されるべきものではないかと思うのです。

3、「ポスト資本主義」を語る新たな論立てを

紙数が尽きつつありますが、最後に、前節の内容も引

き継ぎながら、「ポスト資本主義」をどのように論じるべきかという問題を考えておきます。

長砂論文は、「現代資本主義を乗り越える社会主義」が脱出口として求められており、そのような客観的な「左翼の出番」に応えるために「新しい社会主義」の構想が必要だとしています。そして、その実現への道について「資本主義の枠内での民主主義革命」と「社会主義的変革・革命」のあいだに「万里の長城」を設けるべきではないと指摘します。

荒木論文は、「マルクス社会主義」とは異なる「実現可能な社会主義」の積極的な提起が、今日の閉塞感の打破のために必要で、「社会主義の未来を語ること・考えることとは、当面する階級闘争の見地を忘れることでは決してなく、むしろ、今日求められている運動の目標と方向を示すことであり、逆に、それなくしては現実の運動論としての核心を欠く」と強調します。

聴濤論文は、政治生活の舞台で「社会主義」が語られなくなったことをソ連崩壊以後の「理論・思想上の混乱」だとして、ソ連やユーゴの歴史的体験から教訓を引き出し、現代資本主義が生み出す特徴とあわせて、実現可能な新しい社会主義を構想することが必要だとしています。

岩田論文には、これに類する文章はありません(思想者であり認識者であることについての独特の自己規定によるものと想像します)。大西論文にも、「ポスト資本主義」を論ずることの意味に関する記述はありません。

北見論文は、人間の「命が愚弄された状態」から、「万人の命と自由の保障を究極の目的とする民主主義」の実現にむけた社会の改革を展望し、そのような脱資本主義には、人類が経験したどんな革命よりも優れた知性が必要とされるとしています。

振り返ってみれば、私が大学に入学し、マルクスと社会主義を初めて知ったのは1975年のことでした。その後の社会主義についての私の学びは、一つはマルクス等古典家たちの著作にかかわるもので、もう一つは、20世紀の「社会主義」が日本の政治状況に及ぼしてくる、もっぱら否定的な現象をきっかけとしてのものでした。

「発達した社会主義」を自称しながら、日本の平和運動や政治運動に「分派」まで育てて介入してくるソ連は、はたして本当に社会主義なのか。ベトナムやアフガニスタンへのソ連の軍事介入や、「天安門」広場で人民に軍事力を差し向けることは、社会主義の大義にかなうものか。ありうるのか。「社会主義」を自称した政権が、これほど強い人民の批判を浴び、一挙に崩壊せざるを得なかった

いま「ポスト資本主義」をどう論ずるか

のはなぜなのか、等々。そうした、なかば不測の事態が引き起こされるたびに、「社会主義」は日本の「政治生活の舞台」の中心に現れ、私はそうしたリアルな政治体験の中で、断続的に社会主義を学んできたのでした。

さらに、ソ連・東欧諸国の崩壊は、社会主義と「社会主義」をめぐる日本の政治や論壇事情に大きな変化を生みました。「共産主義終焉」論の大洪水に、社会主義本来の理論と運動がめざす社会主義の体制はどういうものか、それに照らして崩壊した「社会主義」はどういうものであったのか、これらを太い軸とした反論が行われましました。そうした議論の意義と必要性は、いまだ少しも減退していません。

しかし、ベルリンの壁崩壊から25年をへて、「資本主義万歳」論の神通力が切れ、「資本主義の終焉」を語る著作が大きな注目を集める状況下で、社会主義をめぐる議論をその点のみに集中させていくことは、もはや政治的にも適当ではないでしょう。右の議論を発展させながら、それに加えて、いま私たちが生きている21世紀の資本主義に根をもち、そこからの脱却に焦点をあてた社会主義論の論立てが、新たに求められているように思います。その道の探求は、「いまますぐ社会主義」論ではもちろんないが、同時に「社会主義を論じない」論であっていいわ

けがないという、本書にも見られる、ある種の焦燥感にも似た、誠実で切実な思いに、新しい回答を与えるものにもなるように思います。

私には、その論立てを、ここでまとめて提示する力はありません。しかし、思いつくままに、現時点で述べることの骨子を紹介すれば、それは、

①21世紀の現代資本主義が内包する矛盾の解決に焦点をあて、②直面する問題の解決に向かう資本主義の枠内での改革の策を提示しながら、③あわせてそうした問題を生じさせる資本主義の歴史的・根本的な制約への告発と、④その制約を克服すること（脱資本主義）の必要の確認を忘れず、⑤さらに、課題の達成に向かわずにおれない主体的条件と、「ポスト資本主義」のあり方を方向づける客観的条件の成熟を、現代資本主義の内部に指摘し、⑥目前の改革から「ポスト資本主義」の実現にいたる一連の改革の発展過程を論じていく。

こういう要素を含んだものになるのではないかと直観します。

以上、小論が、本誌での議論のさらなる展開に、いくらかでも役立つことを期待します。